

In this land lay graves of mine

Memories and Testimonies of The Lebanese Civil War

戦争や戦時暴力の記憶にいかに向き合うかは、現代においても重要な問題です。内戦下など、誰もが、時には顔見知りの関係であっても、被害者や加害者になることもあります。

本シンポジウムでは、戦争や戦時暴力の問題と向き合うため、そして、今まさに内戦下にあるシリアの将来を考えるために、その隣国のレバノンに目を向けます。レバノン内戦の終結後四半世紀を経て、その記憶がいかに向き合われているのかを、証言映像とともに見ていきたいと思います。

日時：2019年 2月8日(金) 17:30-20:30

**会場：東京大学 東洋文化研究所
3階 大会議室**

※ 入場無料
事前登録不要

**登壇者：レーン・ミトリー監督
黒木英充氏 他**

レバノン内戦の

「この地にわが墓所あり」

記憶と証言



主催：
科研費基盤研究(B)シリア内戦の比較研究—レバノン・旧ユーゴスラビアの内戦と戦後和解（代表：黒木英充）
科研費基盤研究(A)イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究（代表長沢栄治）
東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

共催：
中東映画研究会
東京大学 東洋文化研究所・班研究「中東の社会変容と思想運動」
東文研東洋学情報センター・セミナー



プログラム：

司会 ケイワン・アブドリ（神奈川大学）

17:30 開会の言葉 後藤絵美（東京大学）

17:40 解説 黒木英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

18:00 ドキュメンタリー映画「In This Land Lay Graves of Mine」上映開始
（110分、Reine Mitri監督作品、アラビア語音声、英語字幕）

19:50 休憩

20:00 レーン・ミトリー監督を迎えて

20:30 閉会の言葉 長沢栄治（東京大学）

監督：レーン・ミトリー Reine Mitri

レバノン生まれの映画監督・プロデューサー・文筆家。レバノン、特にベイルートの社会変化に注目しつつ、人々の記憶を問う映画を製作している。今回の上映作品のほかにLost Paradise (2017)、Vulnerable (2009)、The sound of footsteps on the pavement (2004)などのドキュメンタリー作品がある。



上映作品：In this land lay graves of mine (2014, Lebanon, France, Qatar, UAE) 110 min.

レバノン内戦（1975－90年）のなかで、虐殺と強制移住は、キリスト教徒・ムスリム、レバノン人・パレスチナ人を問わず多くの人に降りかかった。様々な立場の内戦経験者の証言と記憶をもとに、今日もなお人々が不安にとらわれ、人口移動と土地所有の問題が宗派主義的に語られる現実と、そこで抱える人々の苦悩を描き出す。